



# 青木村子どもはつらつネットワーク通信

平成29年度 第145号 10月1日  
青木村子どもはつらつネットワーク事務局発行



8月に行われた「国際交流生徒海外派遣」「信州大学人文学部の青木中学授業見学」「黒板ジャック」についてお伝えします。



青木中学校は、1999年からオーストラリアのワラグルにある私立高校マリスト・サイオン・カレッジと毎年交流を行っています。青木中学の生徒によるオーストラリア訪問とマリスト校生徒の青木村訪問を毎年交互におこなっており、今年は青木中の生徒15名が8月2日から12日までの11日間、交流や観光に行ってきました。引率された英語科の先生にお話しをお聞きしました。

## マリスト・サイオン・カレッジとの交流に参加して

青木中学校英語教諭 吉澤 真弓

青木中学校の生徒海外姉妹校派遣も10回目(受け入れを入れると18回)となりました。自分でも驚きですが、そのうち3回も引率に携わることになりました。これは巡り合わせの妙としか言いようがないのですが、本当にありがたいことだと思っています。

帰国後、夜中にテレビでたまたま目にした風景がどこかで見たような…と思ったら、休日にマリスト校の先生方に連れて行っていただいたメルボルンの風景でした。NHKの「鶴瓶の家族に乾杯」でしたが、メルボルンの人々のフレンドリーな様子や、たまたま出会った家族とふれあい、家にお邪魔してお茶や食事をごちそうになる様子がワラグルでの生徒たちのホームステイの様子に重なるように思えて、すっかり引き込まれてしまいました。次の日も仕事だというのに、最後まで見てしまい、気付けば夜中の1時半。(録画しておくという方法があったのに…)という感じで、まだオーストラリアの余韻に浸っています。



マリスト校の生徒が作ってくれた歓迎のポスター

さて、マリスト・サイオン校での交流については、今回もエリース先生をはじめとして、このプロジェクトにより高校生の時に青木でホームステイをしたエリー先生、日本語教師ア

ムステイをしたエリー先生、日本語教師ア

シスタントの奥山瑠捺さんら、担当の先生方が心を配り計画してくださいました。

8月4日（金）は、マリスタ校の生徒が次年度の選択教科を決めるための相談日ということで、青木中の生徒だけでヒールズビル・サンクチュアリへ。ここではオーストラリア固有の動物たちが飼育されていますが、3回目にして初めて、昼間動いているコアラやウォンバットを見ることができました。

8月5日（土）・6日（日）は、生徒たちはホストファミリーとずっと一緒です。オーストラリアの家族と休日をとともに過ごし、知っている英語を駆使してコミュニケーションをとるという経験は、この滞在の中でも一番貴重で、思い出に残るものであったのではないかと思います。

7日（月）は、いよいよ学校での生活。まずは歓迎会です。打ち合わせ通りには行かなかった所もありましたが、堂々と自己紹介、パフォーマンスをすることができました。2時間目はワラグルの市長さんが学校まで来てくださり、セレモニーがありました。ここでの自己紹介、パフォーマンスはさらにグレードアップしました。3時間目はブッシュダンスの練習。見よう見まねで踊りを4種類覚えめました。4時間目のソーセージロール作りは、ホストシスター／ブラザーだけでなく、初対面の生徒さんもいましたが、すぐに馴染み、楽しくおいしく作ることができました。お昼は自分たちが作ったソーセージロールを食べました。5時間目は農場（9年生のエマさんの家）見学です。そこでは、生まれて数日の子牛を見たり、搾乳の様子を見たりしました。初めて見た生徒がほとんどでしたが、オーストラリアが酪農国であることが実感できたのではないかと思います。外にいる間にもものすごい雨が降り出したのにも驚きました。そのあとは学校に戻って下校です。その夜はブッシュダンスパーティ。



マリスタ・サイオン・カレッジの生徒さんたちと

ホストファミリーが一堂に会してのパーティでした。楽しく踊り、交流を深めました。

8日（火）は、早くも学校訪問最終日。1, 2時間目はホストシスター／ブラザーと一緒に授業を受けました。あたりまえですが All English の授業です。でも、ホストシスターやブラザー、バディがとてもよくアシストをしてくれている様子でありがたか

ったです。日本での授業との違いや共通点も感じられたと思いますので、そんなことも全校に伝えてほしいと願っています。3時間目はブーメランづくり。先住民族であるアボリジニの伝統的な模様を電気のコテで焼き付けていきます。デザインに悩みながらも仕上げ、思い出の品となりました。4時間目は体育で卓球。ダブルスでペアを交代しながらプレイし、笑い声が絶えない時間となりました。5時間目は小学校訪問。日本語教育強化指定校ということで、1年生が日本語の歌で迎えてくれたことにまず驚きました。また、他の学年では、手

話をつけて日本語を覚えており、ボキャブラリーの多さにも驚きました。動きをつけながら話すと定着もいいとのことでした。マリスタ校をはじめ、オーストラリアでは外国語学習の選択肢に日本語がある学校が多く、日本とのつながりを大切にしてくれていることが感じられ、とても嬉しく思いました。

そして、マリスタ校でのすべての授業が終わり、荷物をすべて片づけて生徒たちが下校した控室では、しばししみりとした時が流れました。

生徒ひとりひとりを家族の一員として温かく迎え入れ、接して下さったホストファミリーの皆さん、生徒たちが充実した交流ができるよう心を砕いて下さったマリスタ校の先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。

さて、帰国した今、こまゆみ祭での発表に向けて、まとめが進行中です。姉妹校での授業や、ホストファミリーとの交流の中で感じ、学んできたことを全校に伝え、広げていってほしいと思います。

今年ホストシスター／ブラザーとして受け入れてくれた生徒たちが、来年も日本語をとることを決めたそうです。青木中の皆さんの影響も大きかったということです。来年度は受け入れの年。その準備ももうすぐ始まります。未永く続く交流となるように、計画を進めていきたいと思っています。

最後に、姉妹校交流にあたり、いつも手厚いご支援をいただき、温かく見守ってくださっている村当局に、心より感謝申し上げます。

このような貴重な機会をいただき、本当にありがとうございました。



8月24日から25日には信州大学人文学部の生徒13名が青木中学に来校し授業を参観した後に、「生徒が自ら課題を持ち、自分の言葉で伝え合い解決する授業のあり方」についてグループに分かれて話し合いました。

## 青木村の教育現場を体験して

信州大学人文学部人文学科3年 出井 沙奈美



2日間の実習では、授業に加えて学級での活動を見学しました。さらに、最終日にはアイリスセミナーにも参加しました。

青木中学校は、教員と生徒の心の距離が近く、子どもたちが前向きに学校に通える環境が整っていると感じました。それ

だけでなく、学習環境も非常に整備されており、複数教員授業・授業内の学習目標の提示・放課後学習など、生徒一人ひとりの現状に合った主体的な学習への支援の充実が見て取れました。また、地域で子どもを育てていくアイリスセミナーでは、子どもたちは真剣な表情でそば打ちの技法を学び、一方で講師の方は嬉しそうに手ほどきをしているのが印象的でした。

今後は、今回学んだ青木村の教育を、これから実際に接する子どもたちの現状に合わせて応用していきたいと考えています。その上で、青木中学校の生徒たちのように、はつらつとした笑顔に出会えたら、この上ない幸せだろうと思います。



8月22日には青木小学校において今回で3回目になる黒板ジャックが行われました。

## 黒板ジャック

武蔵野美術大学の学生3名が1年1組、4年1組、5年1組のそれぞれの教室の黒板に、前日チョークで絵を描き、2学期始業式の朝登校してきた子どもたちを驚かせました。



## 編集後記

オーストラリア訪問をきっかけに英語や外国に興味を持つ子どもたちが沢山います。この交流がこれからも長く続くといいですね。

